中国サマースクールの成果と可能性に関する一考察

－　新潟大学法学部　２０００年度
清華大学サマースクール　アンケート調査　報告書　－

真　水　康　樹

目次

はじめに
第１部　事前アンケート
第２部　事後アンケート
第３部　追跡アンケート
むすびにかえて

はじめに

２０００年８月５日から９月８日まで、新潟大学法学部の７回目の中国サマースクールが実施された。実施場所は協定校である清華大学人文社会科学学院である(1)。今年度は、法学部生２４名、工学部生３名の計２７名が参加した。

７回目に至って参加者は過去最高となり、延べ人数も１５０人を超えた。この７年間１度も事故がなかったことは奇跡に等しく、その幸運は喜ばなければならない。他方、制度疲労がないわけではなく、今後の実施が確実に保証できる状況にはない。廃止も含む全般的な見直しは不可避な状況である。しかしいずれにせよ、現状の把握と検証は不可欠である。その必要を痛切に感じていたこともあって、本年度はサマースクール実施前と実施後にアンケート調査を行った。また、終了３カ月後に追跡アンケートも行った。いわゆる択一式の調査形式をとらず、自由な記述式の意見を求めたため、統計処理に馴染まない面もないではないが、逆にサマースクールが果たしてきた役割をリアルに映し出している面もある。全般的な再検討のための検討資料として以下に報告をまとめることとしたい。

勝手ながらこの清華大学サマースクールについて簡単に紹介させていただく。法学部の清華大学サマースクールは１９９４年に開始された。参加人数の変遷を追ってみると、９４年が１４名、９５年が１８名、９６年が２５名、９７年が２１名、９８年が２５名、９９年が２４名で、２０００年が２７名。延べ参加者は１５４人になる。このサマースクールの特徴を学習面に限ってあげると次のようになる。

(1)１日６時間、４週間で１２０時間の授業時間
(2)やる気のある者だけのクラス
(3)課外時間の有効活用：日本語禁止

中国でのサマースクールは、民間のものも含めて数多いが、この３条件を満たしているものは恐らく全世界で新潟大学法学部のサマースクールだけである。個人的な回顧で恐縮だが、大学院生時代にありったけの費用を捻出して、ある民間企業の中国サマースクールに参加した。１９８６年のことである。中国語力の大幅アップを期待してのことだが、その期待は見事に裏切られた。毎日４時間の授業は、やる気のある者にとっては、決して多くはなかった。そして、私以外の１１名のクラスメートはみな遊びたい盛りの女子大生で、費用は当然両親の負担、講義には何の予習もして来なかった。予習をしてこない学生と先生がコミュニケーションをとっている間に、５分、１０分と時間は過ぎていく。こんなクラスメートが１１人。これでは勉強になるわけがない。イライラしている間に、毎日、４時間はあっという間に終わってしまう。おまけにこのときは、先生のほとんどが大学院生のアルバイトだった。意識の点でも、メソッドの点でも理想的とは言えない状況だった。上記、(1)(2)のメニューを考えたのはこうした経験による。毎日６時間の授業時間を設定しているサマースクールは、中国側の担当者も「中国内では他に例がない」と言い切る。世界で新潟大学法学部だけのものと言っても過言ではないはずである。その６時間が、やる気のある学生だけで構成されているのだから、その相乗効果は言わずもがなであろう。募集にあたっては、しつこいほどに勉強することを条件に受け付けている。この毎日６時間のメニューは第１回からずっと変わらない。この法学部のメニューを初めて提示したとき、清華大学の留学生事務室長からは一笑に付されてしまった。「日本の学生がそんなに勉強するわけがない」というのである。民間のサマースクールは多くが観光半分の大名旅行であることは半ば常識だから、この事務室長の反応はむしろ当然だったというべきだろう。しかし、それだけに、第１期サマースクールが成功したとき、清華側の対応は一変した。「来年からは新潟大学を最優先にする。われわれだってやりがいのあるパートナーの方がいいに決まってる。人数は今後いくら増えてもかまわない」と、過分な評価を頂戴した。清華大学ほどの名門校からのこのお墨付きは貴重な財産となった。(3)のメニューは、その後の長期留学時代の体験から思いついたものだ。中国語を必死で身につけようとする者ほど、同国人とはできるだけ喋らない、もしくは、最低限、意識的に日本語抜きでコミュニケートする。語学を身につけるとは、結局その言語で思考することだから、意識的な学生ならこれくらいは当たり前のことだ。サマースクールでは、食事の時間も含めて、廊下等、自室以外の全ての場所で、「日本語禁止」を徹底している。このため、全員が必ず揃う昼食と夕食のテーブルは、授業プラス・アルファの勉強時間になる。ある程度基礎力のある学生なら、限られた語彙のなかでも、かなりの幅の表現を行えるし、場を与えられることで応用力もつく。食事の各テーブルには、必ず上級者が配置されているので、適切なアドヴァイスも得られる。初心者は初心者で、ヒアリングのトレーニングになるし、語彙も増える。そして、一言も喋れなかった、聞かれていることはわかったのに答えられなかった悔しさは、さらにいっそうの学習意欲を育てることになる。効果は絶大だったと自負している新潟大学法学部の清華大学サマースクールの特徴は以上である。北京大学への派遣留学生３１名のうち３０名が、また、清華大学への派遣留学生１０名のうち８名が、このサマースクールの経験者であることも、充分に理解されよう(2)。また、「法学部はサマースクールで単位を金で売っている」と陰口を言われたことがあるが、この話を聞くと学生たちが「激怒する」理由も分かって頂けるものと思う。そんなさもしい心構えで勤

まるほど、清華大学サマースクールは甘いものではないのである。

以下、第１部としてまとめたものは、７月２５日に実施した「２０００年度サマースクール事前アンケート」の結果であり、第２部としてまとめたものは、８月２７日に実施した「２０００年度サマースクール事後アンケート」の結果である。また第３部の内容をなす「２０００年度サマースクール追跡アンケート」は１２月に行われた。

法学部生２４名の内訳は、１年生７名、２年生１１名、３年生５名、４年生１名。工学部の３名は全員４年生である。工学部３名は若干参加の背景がことなるので、基本的には検討材料から除外した。したがって、特に断りのない限り母数は基本的には２４名である。また、第３部追跡アンケートについてのみ、母数は２２名である。以下で太字の部分は、タイトルとアンケートの質問文である。

第１部「事前アンケート」

Ｑ１：サマースクールの存在を何時知りましたか？

１：入学前　　２：入学後

「入学前」と答えた者１７名、「入学後」と答えた者７名。

Ｑ２：サマースクールの存在をどうして知りましたか？

「入学前」と答えた１７名のうち、１３名が高校生のうちに法学部のパンフレットを通じて知っており、４名は入学手続き書類と一緒に２月に配られたサマースクールの案内を通じて知ることとなった。「入学後」の７名の答えは様々だが、２名は入学してすぐにガイダンスを通じて知ったという。

Ｑ３：サマースクールに行く決心をしたのは何時ですか？

「入学前」に決めていたのが１名、「入学後の説明会直後」が９名（このうち、１年生が７名）、「存在を知ってすぐ」が１名、無回答が１名、残り１２名の答えは多種多様である。

Ｑ４：サマースクールに行くのは何度目ですか？中国以外も含めて、教えて下さい。

「初めて」が合計１４名で、内訳は１年生が７名、それ以外が７名。「２度目」が９名で、そのうち２回とも中国サマスクールなのが６名、英・中のセットが２名、加・中のセットが１名。中国３回が１名だった。

Ｑ５：サマースクールに何を一番期待していますか？

書き方は多様だが、「中国を自分の眼で見る」、「中国人とコミュニケーションをはかる」等の回答が１１名、「中国語力の向上」等語学力を第１目標にした者が１１名。「文化遺産・歴史」等に言及した者が２名。但し、ほとんどの者が複数回答をしており、それぞれ優先順位が異なっているだけだというのが妥当な理解かも知れない。

Ｑ６：勉強の面で不安はありますか？それはどんな不安ですか？

講義についての不安に言及したのは２１名。特に１年生は全員がそうである。２１名中、「ヒアリング・会話」への不安が９名、講義そのものの進度や周囲のレヴェルについていけるかどうかという不安が８名、その他の４名は別の理由。２１名以外のその他の３名は、

「頑張るのみ」１名、「先生がどんな人か」１名、「特にありません」が１名。講義についての不安の典型的な回答は次のようなもの。

「日本語がまったく通じないので、ついていけるかどうか不安です。最初の数日間ではなく、ずっとその状態が続いて、何のために中国に行ったのか分からなくなったりしたらおそろしいです」（１年生・Ｆ）。

Ｑ７：勉強以外の面で不安はありますか？それはどんな不安ですか？

「健康・食べ物・生活習慣」等をあげたのが１６名、「集団生活の人間関係」が３名、その他の理由が４名、「特になし」は１名。この問いも複数回答があり、「健康・食べ物・生活習慣」と同時に「人間関係」をあげた者が２名いた。

Ｑ８：日本語禁止の方針についてどう思いますか？疑問や反対意見もドンドン書いて下さい（でも、絶対やめないけど）。

「はじめに」でも触れた通り、「土曜日、日曜日以外は一切日本語禁止」が清華大学サマースクール創設以来の伝統である。申し込んできた者には何度もこのルールについて確認をとっている。その上で申し込んできた者ばかりのせいか、肯定派が２１名、判断保留派が３名の比率だった。中国サマースクール２度目の６名と３度目の１名はすべて絶対肯定派である。２度目の絶対肯定論は、次のようなもの。

「大賛成です。この方針のおかげで、去年は覚えられた単語や会話のフレーズが増えましたから」（２年生・Ｆ）。

逆に、「厳禁というのはちょっと厳しすぎませんか。自主性に任せてみれば？」（２年生・Ｍ）という疑問も投げかけられたが、「自主性」ではうまくいかない。当方には当方の信念がある。

Ｑ９：日本語禁止も含めて、部屋でもできるだけ中国語を使うよう心がける等、自分で中国語を身につける環境を意識的に維持できると思いますか？

「食堂、廊下等では日本語禁止だが、部屋の中までは干渉しない」というルールの上での質問である。「努力する・するつもり」が２０名。そのうち「やれる」と断言した者が３名、すべて２年生の女子である。「最初はできる」と自己分析した者が３名。「自信ありません。できる限り努力します」が典型的な気持ちと言えるかもしれない（だから、「自主性」ではうまくいかない）。

なおその他の４名の中では「自分だけでは難しいと思います」という冷静派が１名、「わからない」という判断保留が１名、「微妙ですが努力はします」という懐疑的努力派が１名、「(できるとは)思えない」が１名であった。

Ｑ１０：サマースクールの参加費用は誰が負担しますか？あるいは負担割合はどの程度ですか？

全額保護者の負担が１４名。逆にほぼ全額自己負担が７名。その他、負担割合を書いた者が３名で、その割合は３者３様である。自己負担者が７名もいたことには驚かされた。５０万円以上かかる英国、ドイツ、カナダとの大きな違いの在処だ。ただし、主観的に言えば、自己負担であるか否かと、やる気との間には相関関係はないように思われる。

Ｑ１１：サマースクールに参加することについて保護者は好意的でしたか？それとも、説得するのに苦労しましたか？反対されたとしたら、それはどのような理由でしたか？

「好意的だった・非常に好意的だった」が１７名という数字は、サマースクールが保護者の熱いご理解に支えられていることを裏付けている。その他、「特に反対されなかった」が１名。残り６名については、次のようなやりとりが報告されている。

「２年生になってからにしろと参加決定後に文句を言われた」（１年生・M）。

「初めは反対されました。留学をあきらめる代わりにサマースクールへの参加を認めてもらいました」（２年生・F）。

「去年も行ったからという経済的理由で反対されました」（２年生・F）

「さみしいと言われたが、私の性格から諦めて賛成」（２年生・F）

「最初は去年と２年連続ということで少し反対されたが今は協力的になった」（２年生・M）

「『夏休み１カ月を使って行く必要があるのか。その成果はあるのか』と言われました」（２年生・F）。

Q１２：計４回、説明会をやりましたが、説明の仕方はどうでしたか？不十分なところや、説明の足りなかったところがあったら教えて下さい。

「特になし・よく分かった」が２１名。「ルール集の配付が遅かったこと」に触れた者が２名。無回答が１名。手前味噌な総括であるが、「適度に緊張感があってよかった」（１年生・F）というのが一般的な回答と言えようかと思う。

なお、工学部の３名は、当然のことながら、全員サマースクールは初めてで、その存在を知ったのも最近のことであった。ただ、４年生ということもあって、その他のアンケート項目に対しては、法学部の初めての参加者よりはクールな反応をみせた。

第２部「事後アンケート」

事後アンケートは、８月２７日に行われた。４週間の講義日程の最終日である。以下、母数はやはり法学部学生の２４名である。

Q１：サマースクールの全般的な感想はどうですか？

１：満足　　２：まあ満足　　３：やや失望　　４失望

「満足」が１７名、「まあ満足」が６名、「やや失望」が１名。但し、「やや失望」の１名はその理由に「自分に失望」とある。

Q１’：その理由は何ですか？

サマースクールが学生１人１人に対して持っている意味は、この質問への答えに集約される。煩雑だが１つ１つ紹介することとする。まず、「満足」の１７名。

「自分にとっていろいろな意味でプラスになったと思うので参加してよかったと思います」（１年生・F）。

「中国語の勉強もしっかりやって、その上いろいろなところも参観できて、充実していたから」（１年生・F）。

「自分なりに中国語の力が伸びたと思うから。それから毎日の生活がとても楽しくて充実したものだったから」（１年生・F）。

「中国語の口語とヒアリングの能力が向上したから。それ以外にも北京市内の多くの場

所を見学できて文化にも触れられた」（１年生・M）。

「日本での１年間に相当する授業量を連続して受けられ、漢語能力が向上し、また、重要地見学、生活一般を通して、中国の文化や習慣を多少なりとも知ることができたので」（１年生・M）。

「中国に実際に来て、様々な体験ができたこと。そしてサマースクールに参加したことで、普通に生活していたら滅多に知り合うことができないような人々と一緒に生活できたこと。とにかく沢山の良いことがあって濃い１ヶ月でした」（１年生・F）。

「授業が充実していたこと。集中して取り組めたこと」（２年生・F）。

「同室の人とも上手くいき、楽しく学習できたから」（２年生・F）。

「中国での生活がとても楽しかったこと。中国語力の向上にとても役だったこと。すべてにおいて満足です」（２年生・F）。

「自分の努力不足で、中国語で会話をするという目標は完全には果たし得なかったが、授業の先生方をはじめ、清華大の留学生たちと、つたない中国語ながらもなんとか会話ができた。自分のできる範囲内で、見るもの、聞くもの、いろいろと吸収できた」（２年生・M）。

「今までのたるんでいた気持ちが引き締まり、周りの頑張っている人を見て、刺激を受けたこと」（２年生・F）。

「とにかく、漢語の授業がものすごく充実していたと思う。また、北京のいろいろな面を見られた所も大変良い経験となった」（２年生・M）。

「授業の先生に恵まれたことと、日程の組み方など、とても整えられた環境の中で１ヶ月過ごせました。大変満足です」（２年生・F）。

「小さなトラブルを挙げるときりがないが、私が思うに今のところは全員無事に最後の授業を迎えているから」（３年生・M）。

「たくさん友達ができ、中国語も多少上達したと思うので」（３年生・M）。

「中国語能力、特にヒアリングが向上したこと」（３年生・F）。

なお１年生１名が理由については無回答（但し、次頁Q２の最初の回答が同人のものである。）次に「まあ満足」の６名。

「希望通り中国語につかることができた。しかし、あまり外出しなかった」（２年生・F）。

「授業の予習の時間が多くなりすぎて、復習にまで手が回らなかったこと。また、勉強が忙しすぎて、参観する余裕がなかったこと。でも勉強が目的なので満足です」（２年生・F）。

「２度目の参加ということもあり、去年の自分よりも成長していることが実感できたからです」（２年生・M）。

「自分の中国語が思ったほど伸びなかった」（２年生・F）。

「授業については満足でしたが、いろいろあって、体調を崩してしまったので、全般的に満足とは言えません」（２年生・F）。

「中国語の授業がほぼ毎日あって、充分に勉強できたから。身体をこわさなかったらもっと受けられたと思うので、それが残念だ」（４年生・F）。

ここに見られるように、体調の善し悪しは、満足度に大いに影響する。

なお、「やや失望」の１名。

「自分に失望。努力がかなり足りない部分があって悔やまれる」（３年生・M）。

Q２：サマースクールで何が一番充実してましたか？

「授業」をあげたのが１３名、「外国での日常生活」が８名、「中国文化に触れた」が２名、「自由行動」が１名。中国語の勉強をするという目的がはっきりしている以上、毎日６時間の授業も何ともなかったということだろうか。「外国での日常生活」をあげた８名のうち、特筆すべき意見を以下にあげる。

「するべきこととやりたいことが本当にたくさんあって、１日１日の密度が濃かったです。１カ月があっという間でした」（１年生・F）。

「いろんな年齢の人と出会うことができてかなり刺激になったと思う」（１年生・F）

「留学生楼に宿泊できたことで中国人のみならず、ドイツ人、マレーシア人、オーストラリア人など、各国の学生と知り合いになれた」（２年生・M）。

他方、「規則正しく生活できた」（２年生・F）という意見もあった。

１年生にとっては、多くの上級生と事実上初めて親しく接するチャンスだという面は、アンケートのそこかしこから浮かび上がってくる。

Q３：何が一番の収穫でしたか？（Q２と同じでも構いません）。

この問いについても省かずに紹介することとする。順序は、「Q１'」と同じである。

「自分の身を以て中国の生活を体験できたことです。中国語の勉強になったことはもちろんのこと、中国の文化を学んだり、いろんな人と知り合いになったり、様々な人生経験ができたことが一番の収穫です」（１年生・F）。

「（無回答）」（１年生・F）。

「いろんな人といろんな話をして、なんとなくではあるが自分の目標のようなものがみえた気がする。日本に帰ってからもその目標に向かって頑張れそうです」（１年生・F）

「日本と中国の文化の違いを学べたこと」（１年生・M）

「中国文化の体験」（１年生・M）

「いろいろな人たちと知り合えてたくさん話ができたこと。中国語が上達したこと」（１年生・F）。

「たくさんの人と話せたことです」（１年生・F）。

「去年の友人に出会えたこと。去年北京で知り合った人が温かく歓迎してくれたこと」（２年生・F）。

「いろいろな人と知り合えたし、仲良くなれたことと、街にでて度胸がついたこと」（２年生・F）。

「中国語力の向上。と言っても、中国語を抵抗を感じずに話せるようになったという程度です」（２年生・F）。

「共同生活をしたことで、１人暮らしではつい出てしまいがちな『あまえ』をなくせた」（２年生・M）。

「初めて長期の共同生活でいろんな人と話せたこと。語学の重要さに改めて気づいたこと」（２年生・M）。

「著しく中国語の能力が向上したと思われること」（２年生・M）。

「個人的ですみませんが、将来の方向性について僅かながら先が見えてきたことが、一

番の収穫です。それが目的で、サマースクールに参加しましたが、やはり、異国の空気に触れて自分を見つめられたこと、また、それができる環境、時間が与えられたことが大きいです」（２年生・Ｆ）。

「ヒアリングが去年に比べて伸びたこと。作文が書けるうになったこと。久々の集団生活を味わえたこと」（３年生・Ｍ）。

「外国での生活」（３年生・Ｍ）。

「中国語能力」（３年生・Ｍ）。

「ヒアリング」（２年生・Ｆ）。

「授業。去年来たときより多くの人と接することができたこと」（２年生・Ｆ）。

「わかりません」（２年生・Ｆ）。

「単語の数を増やすことができ、口語なども新たに憶えられたことです。また、それをすぐ実践できたので最高でした」（２年生・Ｍ）。

「漢語。中国に居たこと」（３年生・Ｆ）。

「中国語の勉強」（４年生・Ｆ）。

「三国志グッズの買い占め。これが一番の収穫である自分にまた失望」（３年生・Ｍ）。

Ｑ４：何か嫌なことはありましたか？差し支えなければ教えてくれますか？

「特になし」が８名、無回答が４名、「人間関係」が３名、「授業の雰囲気」が２名、その他７名は各人各様。嫌なことは当然いくつもあったと思う。「特になし」の８名はあるいは回答にあたって気を使ってくれたのかも知れない。無回答の４名もあるいは言いたいことがあったのかも知れない。自他共に参考になるのはその他の中の次の３例かも知れない。

「聞き取れない中国語」（２年生・Ｆ）。サマースクールの成否の多く、達成感のほとんどは、要するに語学力の進歩の度合いに由来する。

「慣れない生活で体調を崩したこと。一時は気が滅入ってしまい、日本に帰りたくなってしまった」（２年生・Ｍ）。体調を崩してはどうにもならない。ただでさえ日常と異なった環境の上、授業が６時間もあるというカリキュラムである。健康を維持できたか否かは達成感に直結する。

なお、「もう少し皆が『大人』だったら、各種参観・自由活動も全員が本当の意味で楽しめたと思います」（３年生・Ｍ）という大人の見解もあった。

Ｑ５：あなたが期待したものは得られましか？それは何故ですか？

１４名が中国語の学習面での効果をあげたが、それが最多であった。典型的な回答は次のようなもの。

「得られました。きっとこのサマースクールの制度(日本語禁止や参観など)が充実していたことと、少し自分も努力したからかと思われます」（１年生・Ｆ）。

その他、８名が別の理由で期待通りだったと回答した。「わかりません」１名、無回答が１名。その他の８名のなかで、興味深かったのは以下の回答である。

「勉強を兼ねた中国参観というつもりで参加したのだが、予想以上に勉強がきつかったというのが本音です。しかし、きつかった分『充実した夏期短期留学』という大きなものを得られました」（３年生・Ｍ）。

「中国に来られて、多くの刺激を得ることができました。それだけでも満足ですし、そ

の刺激を今後どう活かそうかとわくわくしながら思案中です」（１年生・Ｆ）。

Ｑ６：何が期待通りではありませんでしたか？それは何故ですか？

「期待通りだった・期待以上だった」というものが７名、「特に思い当たりません」が２名、「よく分かりません」が１名、その他自分が期待通りだったかどうかを書いた者が１０名。その他に次の４例を紹介させて頂く。

「もう少し清華大の学生と話す機会があるかと思った」（１年生・Ｆ）。当然のことだが、夏休みで清華大学には中国人学生はいない。また仮にいたとしても、１年生の語学力で交流をはかるのは、少々難しいかも知れない。

「清華大学の外に出られる時間が少なかったこと」（２年生・Ｆ）。気持ちはわかるが、今の制度設計を維持する限り難しい。

「クラス分け。自分の力がこのクラスでいいのか最後の方までわからなかった」（４年生・Ｆ）。クラス分けは第１次的には引率教員の責任で行っている。そして本番に臨んで、サマースクール開始１週間以内は本人の申し出に基づいて再検討をしている。残念ながら、こうした迷いにまでは責任を負いかねる。

「集団生活を守れない者が多数いたこと。いくら自由活動等の前日とはいえ、午前３時前後まで大酒を飲んで廊下等で大騒ぎをするのはどうかと思う。また、他人の部屋に勝手に入り込み、大切な用事を邪魔した者がいた」（３年生・Ｍ）。今年のサマスクールが大成功だったのは大前提ですが、それでも個別に反省の必要はあるようです。

Ｑ７：期待通りの中国語力がつきましたか？

１：進歩した　２：まあ進歩した　３：あまり進歩なし　４：全然進歩なし

「進歩した」は７名、「まあ進歩した」は１４名、「あまり進歩なし」が３名。「進歩した」７名のうち、４名は１年生。

Ｑ７’：もう少し詳しく教えて下さい。

まず「進歩した」７名の自己分析を紹介する。

「自分の言いたいことを頑張れば言えるようになったように思えるので良かったと思います」（１年生・Ｆ）。

「ついたと思う。自分で意識して発音するようになったことはすごいかな、と思った」（１年生・Ｆ）。

「中国人と少しでも会話できるようになろうと思っていたが、カタコトではあるができるようになったので満足している」（１年生・Ｍ）。

「口語・ヒアリングについて確実に向上した。単純に耳が慣れただけのこともあるが、普通に漢語が耳に入るようになった気はする。口語についても、最初は通じなかった発音も次第に通用するようになった」（１年生・Ｍ）。

「ヒアリングは難しい。なかなか進歩しなかったが、最後の週になってようやく先生が言っていることの８割以上が聞き取れるようになった（このままここにいて勉強したいくらいです）」（２年生・Ｆ）。

「日常生活で話せるようになるとは思ってなかったが、十分進歩したと思う」（２年生・Ｍ）。

「聞いた言葉が思い浮かぶようになりました」（３年生・Ｍ）。

次に、「まあ進歩した」の１４名。

「難しい文法とかは修得していないけど、日常生活に必要な会話を結構身につけたと思う」（１年生・Ｆ）。

「聞く力はだいぶついたと思います。けれど会話がまだまだできません」（１年生・Ｆ）。

「最初に比べれば確実に進歩しましたが、せっかく中国にいるのだからもっといろいろな人に中国語で話しかければ良かった。ヒアリングの力がなく語彙が足りません」（１年生・Ｆ）。

「中国に来る前よりは、伝えたいことを言葉にできるようになりました。が、ヒアリングが思ったほど身に付かなく、自らの努力が必要であったと思います。ですが、中国人と会話できた時、とても嬉しく、それを感じとれただけでも進歩でした」（２年生・Ｆ）。

「授業中先生の言うことが、以前よりも少しだけ速く分かるようになったと思う」（２年生・Ｆ）。

「あまり話せるようになったとは思いませんが、タクシーでぼったくられることなく、ちゃんと目的地まで行けるようになったり、ひとりでバスに乗れるようになったことは進歩だと思います」（２年生・Ｆ）。

「去年のサマースクールでは中国語の上達が実感できましたが、今年も全く上達していないというのではありませんが、去年よりも伸びが足りないような。これからもっと勉強します」（２年生・Ｍ）。

「先生の話はたいてい聞き取れる。が、街の人や小姐の話は『もう一度言って下さい』が多くなる」（２年生・Ｆ）。

「来た当時よりも聞き取る能力はついたと思う。でも、いざ自分から話すとなるとまだまだです」（２年生・Ｍ）。

「発音がすごく良くなったと思う。でも聞き返されることもあるけれど。ヒアリングの方は進歩したが、それでもまだまだ本当に未熟者。悔しさも入って『まあ進歩した』」（２年生・Ｆ）。

「先生の言っていることがすべてではないが聞き取れるようになった」（３年生・Ｍ）。

「未だに一般人の会話を充分に聞き取れない自分を情けなく思うことがかなりあった。また、自分が使える表現手段もまだ少ない。したがって、あと一歩というところだと思います」（３年生・Ｍ）。

「今はまだ分からない。帰って中国語のクラスなど受けてみれば分かるかも知れない」（４年生・Ｆ）。

３年生１名が無回答だった。

次に、「あまり進歩なし」の３名。

「中国に来たときとあまり変わっていない気がする。質問されても答えられない」（２年生・Ｆ）。

「自分一人で行動しなかったため、仲間に頼ってしまった。授業の内容は初めの頃よりは理解しやすくなったが、日常会話はまだまだ努力が必要だと感じた」（２年生・Ｍ）。

「日常会話くらいはできるようになって帰りたいと思っていたのに、大して話せずに帰国の日を迎えそう」（３年生・Ｍ）。

Ｑ８：中国語力が伸びた・伸びなかった理由は何だと思いますか？

「この充実した毎日の生活と授業だと思います」（１年生・Ｆ）。

「中級班の人に発音の練習を見てもらったり、毎日、中国語で日記をつける宿題をやったこと」（1年生・F）。

「商店の人などとできるだけ話すように心がけたこと」（1年生・M）。

「日常生活や日本語禁止など漢語を使う機会が多かったこと。初級班での徹底的な読み、聞きの繰り返し」（1年生・M）。

「友達同士の会話も中国語をなるべく使うようにしたこと」（1年生・F）。

「実際によく使ったかどうかだと思います。私はまだまだ使い足りなかったようです」（1年生・F）。

「最初の1、2週間は伸びたという気がしました。日本語禁止など日常で積極的に中国語を使う機会があったからだと思います。後半中だるみしました」（1年生・F）。

「ヒアリングがなかなか伸びなかったのは、テープを積極的に聴かなかったから。伸びた理由は楽しんで勉強できたこと」（2年生・F）。

「やはり、1日6時間も勉強したのが一番の理由であると思う。あと、それを実践できる場所がすぐ近くにあるのもよいことだと思う」（2先生・M）。

「毎日の予習、復習、積極的に会話しようとする姿勢、あと、先生の授業内容でしょうか」（2年生・F）。

「努力の足りなさ」（2年生・F）。

「私の努力が足りなかったからです」（2年生・F）。

「授業で習った内容を少しでも日常生活において、友達、留学生と話したことが伸びた一番の理由です」（2年生・M）。

「もっと外に出て話そうとすればよかった。でも恐かった」（2年生・F）。

「毎日の予習・復習」（2年生・M）。

「授業への積極的な態度と意欲。留学生や中国人との交流」（2年生・M）。

「授業中及び、日常生活の中で積極的になれなかったところ」（2年生・F）。

「中国人と会話するときに、自分が分からないことを相手の中国人はイラつくのではないかと、少し遠慮してしまった。遠慮しているうちはまだまだ甘いと思う」（2年生・M）。

「同室の人につられて予習を頑張った。漢語での会話を逃げてしまうところがあった」（3年生・F）。

「できるだけ中国語を使うようにしたからだと思います」（3年生・M）。

「授業以外での勉強と、積極的に使うこと」（3年生・M）。

「伸びた理由：授業を皆勤したこと。中国語で日記を付けていたこと。伸びなかった理由：一般の中国人と話したりする機会が少なかったこと」（3年生・M）。

「自分のシャイな性格。積極的に話しかけることができなかったのが大きな理由だと思う」（3年生・M）。

「まぁ伸びたと思うが、もっと中国人と話す機会があればより伸びたかなと思う」（4年生・F）。

Q9：日本語禁止も含めて、部屋でもできるだけ中国語を使うよう心がける等、自分で中国語を身につける環境を意識的に作ろうとしましたか？

この問いは、各人の工夫が最も現れている箇所である。全員の記述をそのまま採録することとしたい。

「しました。自分の話したいことを話すために単語を調べたり、それを意識的にたくさん使うように心がけ、体で憶えるようにしました。でも、微妙に変な日本語と中国語の混ざった言葉を日常的に使うようになってしまいました」（1年生・F）。

「すべての会話を中国語ですることはできなかったけど、なるべくするように努力して、言いたいことが中国語でわからなかったら辞書をひくようにした」（1年生・F）。

「食事中に他の人が中国語で話しているのを密かに聞いたりした」（1年生・F）。食事中の会話にたとえ参加できなくても、ちゃんと学ぶことができることの証左。

「商店の人などどできるだけ話すように心がけたが、部屋の中では日本語だった」（1年生・M）。

「部屋で中国語は大して多く使わなかったが、同室の先輩にいろいろ漢語について指示して頂いたりした。他はと言うとできる限り外に出たことくらい。そこで顔見知った人々と会話をした」（1年生・M）。

「はい。友人間の会話はほとんどニセ中国語を使っていました。そのおかげで語彙が増えました」（1年生・F）。

「英語混じりの、とっても怪しい中国語で頑張りました。部屋の外では極力日本語を使わないように心がけました」（1年生・F）。

「1人で散歩して話し相手を探したり、積極的にバス・電車を使ったこと」（2年生・F）。

「日本で思っていたほどはできませんでした」（2年生・F）。

「苦痛ではなく中国語を使うのが楽しかったです。もっと長くいたいです」（2年生・F）。

「部屋では日本語を使っていた。しかし、できるだけ中国人と話そうと、中国人の集まる玄関先にこまめに足を運んだ」（2年生・M）。

「なるべく中国人と喋るようにした。留学生や中国人と、卓球、バドミントンを通じて交流を持った」（2年生・M）。

「正直ちょっとできなかった。けど、わからない単語とかはすぐに調べるようにしていた」（2年生・M）。

「しました。宿舎の玄関で、また、フロントの人と話そうと、よく散歩しました。が、ちょっと甘えが出て、友人との間では積極的に日本語を使ってたかも。ですが、終盤の方で友達とも、最低の会話ができるようになった時、楽しんで中国語で話せました」（2年生・F）。

「日記をつけていたのは大きかったが、それ以外の面ではいまひとつ努力が足りなかったと思う」（3年生・M）。

「部屋の中ではあまり中国語を使いませんでした」（3年生・M）。

「電話の対応もできるだけ中国語でできるようにしました」（3年生・F）。

「毎日中国語で日記をつけた」（2年生・F）。

「部屋や教室でもなるべく使うようにしていました。高度な内容を話していたわけではありませんが、自然に中国語が出てくる雰囲気は作れたと思います」（2年生・F）。

「多少」（2年生・F。）

「日本語禁止の環境の中で、わからなかった単語などは部屋に戻ったらすぐに調べる習

慣がつきました。頑張りました」（２年生・Ｍ）。

「なかなかできなかった」（３年生・Ｆ）。

「作ろうとしたが結構難しくて、充分でなかった」（４年生・Ｆ）。

「毎日、講義が終わった後、郵便局の隣のＣＤ屋に行って、店員（美人のお姉さん）とお喋りをした」（３年生・Ｍ）。

Ｑ１０：引率教員・助手・清華大スタッフのへの評価や要望を一言

「本当にご苦労さまでしたと感じました」（１年生・Ｆ）。客観的に言って、同様回答多数。ここではいちいち紹介しない。

Ｑ１１：中国語の先生についての評価も聞かせて下さい。

各クラス、先生は２人ずつ。各クラスごとに２つずつ典型的な意見を載せる。

初級班

「先生も一緒に中だるみをしたのが頂けない。でも一生懸命で良い先生でした」（１年生・Ｆ）。

「元気のいい先生で楽しい授業だった。雑談をする時間もあって、その中から会話を学べたけど、ちょっと雑談が多いなーと感じる時があった」（１年生・Ｆ）。

中級班

「Ｌ先生は少し分かりにくかった。Ｙ先生は熱心で授業も非常に分かりやすくて良かった」（４年生・Ｆ）。

「Ｌ先生は帰るのが早くて少しやる気がないのかなと思うこともありましたが、何をしたらよいか考えて下さっていると思いました。Ｙ先生は授業に工夫がしてあり、分かりやすくてよかったと思います」（２年生・Ｆ）。

上級班（中国語では高級班）

「Ｃ先生が授業を数回しか来なかった。Ｇ先生は一生懸命授業を進めていた」（３年生・Ｆ）。

「Ｇ先生は親切で良いと思います。Ｃ先生は話すのが速いと思います」（３年生・Ｍ）。

正直言って教員不足の現実は否定できない。毎年半数前後が入れ替わっているので、十分な相互理解に欠ける点も否めない。また若い教師の比率も高く、経験不足の点があるのは承知している。どこでも理想的な言葉のプロは決して豊富なわけではない。ただ、最初の２日間は、全講義に引率教員が出席し、講義における意志疎通をチェックしているし、してきた。清華側もこれに特にクレームをつけるわけではなく、むしろ、当方の出した改善提案は事実上ほとんど受け入れてもらってきた（Ｃ先生は今年、学会出張が多かった）。

Ｑ１２：同じ時期に滞在した他のグループと比べてどう思いましたか？

自分は自分である。他人がどうであろうと関係ない。したがって、あまり品の良い質問だとは言えないが、しかしそれを承知の上で、学生たちの生の気持ちを伝える意味で、敢えて幾つかの回答を紹介することとする。ただ、学生たちは決して自画自賛に陥っているのではなく、充分に客観的にも自己分析をしている。

「日常生活での緊張感が違うと思いました。食事の時でも頭がショート寸前まで働いていました」（１年生・Ｆ）。これはやはり、日本語禁止の効用。

「遊びに来ていると思われるような人もいたので日本語禁止は強いと思った」（２年生・Ｆ）。

「終えてみて言えることは厳しい授業があってこその１カ月だと思いました。全然うらやましいなんて思いませんでした」（２年生・Ｆ）。民間企業主催のサマースクールは、基本的に午後は自由行動という名のお遊びタイムである。

「午後に授業があった分、こっちの方が充実していたと思う」（３年生・Ｍ）。

他方、シニカルな自己分析もある。

「食堂や、廊下での格好、授業への臨み方は新潟大が No.1 でしょう。しかし、夜中に騒いだりする点は他のグループと大差はないように思えます」（３年生・Ｍ）。

「後に来たある大学のグループは、朝・昼・晩のご飯にみんなで揃ってきていて、それに比べて私たちは、来る時間がバラバラだったりした。彼らは食事中に中国語を使ってこそいなかったが、毎食きちんと揃って来て、素晴らしいと思った」（２年生・Ｆ）。どうです、こういう冷静な自己分析は捨てたものではないでしょう。

Ｑ１３：授業以外の平均勉強時間は毎日何時間くらいでしたか？

大体、２時間から３時間の者が１２名、１時間前後の者が８名、４時間の者が２名。無回答が１名、「分からない」が１名。この自習時間量は、抱いていたイメージよりも少なく、意外に感じている。

第３部　「追跡アンケート」

追跡アンケートを行った理由は２点ある。ひとつは、語学力の面での効果を見極めるにはある程度の時間の経過が必要だと思われたこと。ふたつには、サマースクール終了時の興奮が冷めて、ある程度冷静に振り返ったときの評価を知りたかったことである。

以下に、２０００年１２月に行った追跡アンケートの結果を紹介する。サマースクール終了後、そのまま北京大学国際関係学院に留学した３年生１名と、就職活動のため連絡のつかない４年生１名を除き、残り全員が協力してくれた。したがって、このアンケートのみ、母数は２２名である。

Ｑ１：新学期が始まって、自分に中国語力がついた実感はありますか？

１：大いにある　２：まあ感じる　３：あまり感じない　４：ほとんど感じない

「大いにある」は５名、「まあ感じる」は１３名、「あまり感じない」は３名、「ほとんど感じない」が１名。したがって、以下のＱ２、Ｑ３の回答者の母数は１８名となる。

Ｑ２：（Ｑ１で１または２と答えた人に）次の５つの項目について、一番力がついたと思われる項目から順に１、２、３、４、５の欄に項目名を書き入れて下さい。

	会話	ヒアリング	発音	読解力	作文
1	１０人	５人	１人	１人	１人
2	３人	１０人	５人	０人	０人
3	４人	２人	６人	２人	４人
4	１人	１人	３人	９人	４人
5	０人	０人	３人	６人	９人

予想されたことかも知れないが、「会話」、「ヒアリング」など、オーラル・コミュニケ

ーションの面での力の向上がいっそう身近に感じられるということだろうか。「発音」がそれについでいるのも、そのことを裏付けるようである。「読解力」、「作文力」共に順序は下位である。

Q３：（Q１で１または２と答えた人に）どんな時に、どのようにして実力の伸びを感じましたか？簡単に書いて下さい。

１：会話
２：ヒアリング
３：発音
４：読解力
５：作文

「会話」、「ヒアリング」共に、帰国後に中国人の先生とのコミュニケーションの際に力の向上を感じたという答えが圧倒的だった。

「発音」については、「音読するとサマースクール前よりかなりスラスラ読めるようになったのではと自分では思います」（１年生・Ｆ）。「発音すると通じる」（１年生・Ｍ）は素朴な答え。「舌や口唇の動きに注意して発音するようになった。また、四声についてもしっかり違いを意識して発音するようになった」（１年生・Ｆ）。

「読解力」は「辞書を引く回数が減り、以前よりも速く文章を読めるようになった」（３年生・Ｍ）。

「作文」は「スピーチコンテストの作文をしたとき」が３名で、「授業中に作文したとき」が２名。いずれにせよ、「単語だけを単純に並べようとするのではなく、品詞に注意しながら書こうとするようになった」（１年生・Ｆ）ということだろうか。

「会話」や「ヒアリング」に比べれば不十分だとしても、「読解力」や「作文力」がついていないわけではない。ただ、今回のアンケートはあくまで自己申告なので、実際の実力の変化は計りようがない。

Q４：中国語力を落とさないために、特別に何かしていますか？

全員が何らかの試みをしている。「なるべく中国語に関係のある授業を受けるようにしました。教育テレビの『中国語』も見ています」（３年生・Ｍ）が最多かつ典型的回答。その他、「中国人留学生と一緒に食事をした時など、中国語で会話をしている」（２年生・Ｍ）、「なるべく意識して中国語を日常に盛り込もうとしている」（１年生・Ｍ）等。

Q５：さらに中国語力をつけるために何かしていますか？

この問いは愚問だったかも知れない。ほとんどがＱ４と類似の答えか「Ｑ４に同じ」と回答した。

Q６：１年以上の留学に関心はありますか？その関心に、サマースクールに参加したことで何か変化はありましたか？

２２名中、「関心が強まった」が２０名。「もともと感心なし」が２名。２０名中、９月から北京大学に留学する予定の者が５名、９月まで待ちきれずすでに清華大学への留学に出発した者が１名（２００１年２月２１日出発）。関心が強まった者の中では次のような意見があった。

「あります。英語圏への１年留学を希望していたが、揺らぎました」（１年生・Ｆ）。

「１年の留学を決意しました」（２年生・Ｍ）。

ーションの面での力の向上がいっそう身近に感じられるということだろうか。「発音」がそれについでいるのも、そのことを裏付けるようである。「読解力」、「作文力」共に順序は下位である。

Q３：(Q１で１または２と答えた人に)どんな時に、どのようにして実力の伸びを感じましたか？簡単に書いて下さい。

１：会話
２：ヒアリング
３：発音
４：読解力
５：作文

「会話」、「ヒアリング」共に、帰国後に中国人の先生とのコミュニケーションの際に力の向上を感じたという答えが圧倒的だった。

「発音」については、「音読するとサマースクール前よりかなりスラスラ読めるようになったのではと自分では思います」(１年生・Ｆ)。「発音すると通じる」(１年生・Ｍ)は素朴な答え。「舌や口唇の動きに注意して発音するようになった。また、四声についてもしっかり違いを意識して発音するようになった」(１年生・Ｆ)。

「読解力」は「辞書を引く回数が減り、以前よりも速く文章を読めるようになった」(３年生・Ｍ)。

「作文」は「スピーチコンテストの作文をしたとき」が３名で、「授業中に作文したとき」が２名。いずれにせよ、「単語だけを単純に並べようとするのではなく、品詞に注意しながら書こうとするようになった」(１年生・Ｆ)ということだろうか。

「会話」や「ヒアリング」に比べれば不十分だとしても、「読解力」や「作文力」がついていないわけではない。ただ、今回のアンケートはあくまで自己申告なので、実際の実力の変化は計りようがない。

Q４：中国語力を落とさないために、特別に何かしていますか？

全員が何らかの試みをしている。「なるべく中国語に関係のある授業を受けるようにしました。教育テレビの『中国語』も見ています」(３年生・Ｍ)が最多かつ典型的回答。その他、「中国人留学生と一緒に食事をした時など、中国語で会話をしている」(２年生・Ｍ)、「なるべく意識して中国語を日常に盛り込もうとしている」(１年生・Ｍ)等。

Q５：さらに中国語力をつけるために何かしていますか？

この問いは愚問だったかも知れない。ほとんどがＱ４と類似の答えか「Ｑ４に同じ」と回答した。

Q６：１年以上の留学に関心はありますか？その関心に、サマースクールに参加したことで何か変化はありましたか？

２２名中、「関心が強まった」が２０名。「もともと関心なし」が２名。２０名中、９月から北京大学に留学する予定の者が５名、９月まで待ちきれずすでに清華大学への留学に出発した者が１名(２００１年２月２１日出発)。関心が強まった者の中では次のような意見があった。

「あります。英語圏への１年留学を希望していたが、揺らぎました」(１年生・Ｆ)。

「１年の留学を決意しました」(２年生・Ｍ)。

「関心があります。サマースクールに参加して、自分が本当にやりたいことがみえてきた気がします。将来の目標を達成した後、どうありたいか、どうしたいかも考えられるようになりました。その上で、１年以上の留学に関心を持ちました」（２年生・Ｆ）。

「関心はあります。サマースクールに参加をして、留学をするために自分に足りないものも、具体的にわかりました。ただ、欠点を直して留学をする自信を在学中に持てるかどうかは疑問です」（１年生・Ｆ）。

Ｑ７：サマースクールに参加したことで、中国に対する関心や、語学、留学に対する姿勢など、何か変わったことがありますか？

Ｑ８：（Ｑ７と関連して）それはどのような変化ですか？

Ｑ９：（Ｑ７と関連して）どんな時にその変化を感じますか？

Ｑ７、Ｑ８、Ｑ９については全員の回答を紹介したい。各人毎にＱ７、Ｑ８、Ｑ９への回答を一括して紹介する。

「Ｑ７：もっと中国が好きになった。Ｑ８：いつも中国に行きたいと思っている。Ｑ９：中国のニュースを耳にしたとき」（１年生・Ｍ）。

「Ｑ７：頭の中で外国語概念が英語から中国語に切り替わったこと。２つの中国論など中国の社会生活における政策気風などに対する興味。Ｑ８：英語をしばらく忘却。文章は読めても会話が対応できない。Ｑ９：英語の文章を講義などで読まされるとき。中国関係の書籍や批評を読むとき」（１年生・Ｍ）。

「Ｑ７：中国をより面白いと感じるようになった。Ｑ８：（無回答）。Ｑ９：（無回答）」（１年生・Ｆ）。

「Ｑ７：中国の特に文化に対する関心が大きくなりました。中国語に対しても、不自由なく話せるようになりたいと思うようになりました。Ｑ８：サマースクールに行ってから更に強く思うようになりました。Ｑ９：語学に関して、授業で会話練習が少ないので、話したくてうずうずしてしまうときです」（１年生・Ｆ）。

「Ｑ７：ある。Ｑ８：中国に対する関心はより強まって、もっと中国についていろいろなことを知りたいと思うようになった。Ｑ９：様々な中国に関する資料を読んだり、テレビなどで中国について特集しているのを見た時」（１年生・Ｆ）。

「Ｑ７：中国が抱える問題等、もっと中国のことを知りたいと思うようになった。Ｑ８：サマースクール以前は、留学に対して憧れしか持っていなかったが、親しくなった先輩方の話を聞いて、現実的なものとしてそれを捉えるようになり、もっと留学について知ろうと思うようになった。Ｑ９：自分の周りには中国に対してあまり良くないイメージを持つ人が多くいるので、その人たちにもっと中国の良いところを教えようとしている時」（１年生・Ｆ）。

「Ｑ７：中国文化や歴史をもっと学びたいと思い、また、流暢に中国語を話せるようになりたいとより思いました。Ｑ８：以前より積極的で切実になりました。Ｑ９：常々思っていますが、より強く思うときは誰かと話しをする時です」（１年生・Ｆ）。

「Ｑ７：気持ちが変わった。Ｑ８：２回サマースクールに参加させていただいたのですが、直接中国に触れてやはり、もっと話せるようになりたい、中国のことを知りたい、本が読めるようになりたいと思うようになりました。Ｑ９：無回答」（２年生・Ｆ）。

「Ｑ７：サマースクール期間中、去年は行かなかった北京市内の名所、長白山、長春に

行くことで、日本人として改めて歴史を振り返るチャンスにもなった。留学を現実的に考える機会にもなった。Ｑ８：中国では韓国人留学生が多いので、韓国のことを勉強して交友を育てる上で役立てたいと思うようになったこと。Ｑ９：留学に関しては、中国留学中の日本人学生と話をしたり、北京大学から帰ってきたゼミの先輩との話を通じて。中国に対する関心は、戦争やテレビニュース、新聞から積極的に情報を得ようとした時」（２年生・Ｆ）。

「Ｑ７：語学に対する姿勢が一番変わったと思います。Ｑ８：追求心がより強くなったこと。また、語学を身につけるためには、大胆に、恥ずかしがらずに、何でも言葉に出して相手に伝えようとすることが大切と、改めて気づいたこと。Ｑ９：最近留学生の人たちとの交流がたくさんあるのですが、その時に感じます。ためらうだけ無駄だと感じられるようになりました」（２年生・Ｆ）。

「Ｑ７：日本の見方。Ｑ８：少し客観的に見れるようになったと思う（というより、まだ、中国しか見た事がないから、別の視点から見られるようになったと言った方が正しいかも知れません）。Ｑ９：日本と中国の異なる点を感じた時」（２年生・Ｍ）。

「Ｑ７：中国のもっといろんな面を見てみたいと考えるようになりました。Ｑ８：歴史や中国の文化について、もっと勉強したいと考えるようなりました。Ｑ９：中国の兵馬俑展に行ってきました。そこで売ってたゴマ団子が非常に懐かしかったです」（２年生・Ｆ）。

「Ｑ７：あります。Ｑ８：中国に行ったときに、他の国の人とも話をして、英語の重要さを再認識したので、英語も勉強し始めました。Ｑ９：（無回答）」（２年生・Ｍ）。

「Ｑ７：積極的になった。Ｑ８：（無回答）。Ｑ９：授業中など」（２年生・Ｆ）。

「Ｑ７：様々な中国語表現を身につけて、会話したいと心から思いました。Ｑ８：単純な会話から、中身のある会話をしてみたいという気持ちへの変化。Ｑ９：会話の中で充分に自分の気持ちを相手方に伝えきれない時」（２年生・Ｍ）。

「Ｑ７：何となく興味を持っていたものが具体的になった。Ｑ８：『中国のことを知りたい。一生中国（語）と関わっていきたい』と思うようになった。Ｑ９：中国に関する新聞記事を切り抜いてファイルしている時。人生プランに中国語関係のことを加える時」（２年生・Ｆ）。

「Ｑ７：ここ十数年で中国はものすごく発展したと聞いたので、これから何年かして、再び、中国を訪れ、肌で現在の中国と比べてみたい。ニュースでも中国への関心が高まった。Ｑ８：（無回答）。Ｑ９：テレビや新聞で中国に関するニュースを見る時に感じる」（２年生・Ｍ）。

「Ｑ７：はい。Ｑ８：ニュースなどで、中国のことが取り上げられると、必ず見たり、天気予報まで見てしまったりします。中国がとりあげられているコーナーで、中国人にインタビューをしているところではなるべく字幕を見ないように心がけるようになりました。Ｑ９：ニュースや新聞、テレビを見ている時」（２年生・Ｆ）。

「Ｑ７：あります。Ｑ８：就職後、中国への出張や研修などがあれば、率先して参加したいと思うようになりました。Ｑ９：就職活動のホームページを見ている時」（３年生・Ｍ）。

「Ｑ７：中国に対する関心が歴史だけではなく、現在にも興味を持つようになった。Ｑ８：上記。Ｑ９：中国というものを考えた時」（３年生・Ｆ）。

「Ｑ７：実際に中国を訪れることを通して、日本との違いを肌で感じることができた。そのため、中国のことをもう少し詳しく知りたいとも思いました。Ｑ８：中国の情勢（新聞等）に関心を払い、以前よりも新聞・テレビ等のメディアをチェックすることが多くなりました。また、中国に限らず様々な国を旅行してみたいと思うようになりました。Ｑ９：Ｑ８とほぼ同じです」（３年生・Ｆ）。

「Ｑ７：中国が好きになったし、中国語を学びたいという思うようになったし、留学についてもやってみたいという気持ちが強くなりました。Ｑ８：中国に関する新聞・テレビ等をよく見るようになりました。Ｑ９：留学の話を聞いたり、留学する人を見たりするとうらやましいと思う」（３年生・Ｍ）。

Ｑ１０：金銭、単位など余計なものを無視して考えてみて、もう１度サマースクールに参加してみたいと思いますか？

２２名全員が「参加してみたい」だった。その他の答えがあまりにストレートなので、幾分凝った答えを２例紹介する。

「『余計なもの』に何が含まれるかは分かりませんが、就職活動がなければもう１度といわず、何度でも参加したいです」（３年生・Ｍ）

「もちろん思います。留学できないのなら、あと２回くらい行ってみたいです」（１年生・Ｍ）

むすびにかえて

今年度の、２０００年度サマースクールは成功だった。何より参加者が多かった。人数が多いのは手間がかかるが、正直言って悪い気はしない。経済的にも規模の論理は働く。しかし、そんなことは本質的な問題ではない。おそらく、今回は今までの中でもっとも完璧に「日本語禁止」が実行された。そして、それは強制の結果であるよりも、自発的な意志の総和としてそうなったようにみえる。毎回の食事は、有意義な勉強の場と化した。そして、各学年の参加者の間にも、かつてなく人間的な触れ合いが行き渡った。引率教員個人としても、文句なく、ここ数年になく満足のいくサマースクールだった（その他に印象深いのは、９６年と９７年だが、日本語禁止の実行度という点では、今年度に勝る年はなかったように思う）。上手くいったら欲がでるものだが、「もうこれ以上のことはやれない」と思ったときこそ、節目なのは確かなのだろう。敢えて報告書を作成させて頂き、記録に残そうとするのには、そんな自覚もあるのかも知れない。ただ、アンケートには準備が必要なので、こうなることは何となく自分でも感じていたのかも知れません。

もとより、成功だからといってトラブルがなかったわけではない。以下は、風邪、発熱、疲労等の理由で、講義に出席できなかった者の記録である。今年は最初の１週間不思議なほど、病人が出なかった。「いつか揺れ戻しが来る」と思っていたら、案の定２週目以降は、以下のような状態であった。８月１６日、１７日などは、２日続けて、車で１時間以上かかる市内の国際医療センターまで学生を連れて行ったために、ついでに引率教員もダウンしてしまった。もとより、ここには、腹痛や下痢程度のものはいちいち記録していない。

８月１０日　１名ダウン。
８月１１日　１名ダウン。１名怪我で大学内の病院へ。
８月１３日　２名ダウン。
８月１４日　２名ダウン。
８月１６日　４名ダウン。そのうち１名を市内の国際医療センターへ。
８月１７日　１名ダウン。同１名を市内の国際医療センターへ。引率教員もダウン。
８月１８日　１名ダウン。
８月１９日　１名ダウン。
８月２０日　２名ダウン。
８月２２日　２名ダウン。
８月２３日　１名ダウン。
８月２５日　２名ダウン。
８月２６日　２名ダウン。
８月２８日　２名ダウン。
９月　２日　１名ダウン（－６日まで：小旅行に参加できず）

その他、簡単なトラブルと任務を紹介すれば、８月５日、出発に３名遅刻。清華大学到着後、部屋のエアコン、シャワーのお湯、電話の不通等、３日程度は部屋のトラブルが続発（これらは例年のルーティーンワーク）。８月６日、歓迎宴会・スピーチ。８月７日、開講式にネクタイを着用しなかった者５名・その席でスピーチ。全部の授業に２日間かけて出席。両校間の大学間の連絡でトラブル・その事後処理。全員の航空券のリ・コンファーム。８月８日、授業料・滞在費をドルで徴収、清算。８月９日、途中帰国予定者(工学部学生)の部屋の処理問題と費用の交渉。８月１４日、遅れてくる法学部学生を北京・首都空港まで迎え。８月１６日、小旅行費用を円で徴収。全員にカセット配付。８月１７日、全員の小旅行費用を換金のために自転車で銀行へ。８月１９日、自転車１台盗難。同日、引率教員の自転車の一部が破壊される。８月２１日、新潟大学よりの訪問者の接受準備始まる。８月２３日、自転車１台盗難。８月２４日、他大学が誤解もあって当方に無断で講義をヴィデオ撮影したため先方に抗議・学生からの苦情聴取・事情説明・メンタルケア等・事件処理に計３日。８月２６－３０日、新大関係者接受。８月３１日、工学部学生１名が大学院入試のため先に帰国。８月３１日、修了式・スピーチ。法学部の長期留学の学生たち５名が到着・空港への出迎え・ホテル等手配。９月１日、帰国学生１名の部屋の調整。９月２日、小旅行出発。毎日が緊張。９月８日、北京空港で帰国手続きの際スーツケース紛失トラブル。

これらもまた、手前勝手だが、膨大なスケジュールのほんの氷山の一角である。この他に週に２度は社会見学等の課外活動があり、交流関係のある大学スタッフとの面談・検討事項も多々ある。また、講義の担当教師と学生たちとの意志疎通のトラブルの解決もすべて引率教員の仕事である。

以前「サマースクールに何か個人的メリットでもあるんですか？」と聞かれたことがあ

るが、学生を育てることを除けば皆無である。確かに、新潟大学法学会からの補助はあるが、北京に来るだけなら自分の意思で赴いた方が較べものにならないほど自由である。

今の形態でサマースクールを続けるのはすでに限界に来ている。それが続けられてきたのは、口幅ったいがアンケートに反映されたような学生たちの声があったからこそである。そして、学部からの精神的な支援も大きかった。学生諸君の声は有り難いが、しかし時代もどうやら転換点にさしかかっているようである。この報告書はあるいは終わりの始まりを暗示していたのかも知れない。

注：

(1)新潟大学法学部と清華大学人文社会科学学院とは、１９９８年１１月１１日に学術交流協定を締結した。その後、新潟大学工学部が清華大学建築学院と１９９９年6月7日に学術交流協定を締結した。これら２つの学部間協定を実績として、２０００年３月２０日には大学間の協定が締結された。

(2)新潟大学法学部のサマースクールは、かつて、新潟大学法学部の改革の一環として、高等学校の教員向け専門誌に紹介されたことがある。「大学改革ルポ・個性を探す旅・新潟大学法学部」『Between』,1999.05,No.154